

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 先端分析検査学分野

戸塚 実*

I. 大学・大学院の紹介

東京医科歯科大学は東京の御茶ノ水にあり、周辺には順天堂大学、明治大学、日本大学など、大学が多い文教地区の恵まれた環境に立地しています。

東京医科歯科大学医学部保健衛生学科は、検査技術学専攻、看護学専攻の2専攻があり、検査技術学専攻では1学年35名の学生が学んでいます。その歴史は比較的新しく、臨床検査技師の養成機関としては国立大学で初めての4年制大学として平成元年にスタートしました。

本学科の教育理念は、「豊かな教養と高い倫理

観に裏付けられた医療人としての感性を有し、自ら学び研究し、創意工夫することが出来る人間の形成を目指す」ことであり、専門教育だけでなく教養教育にも重点をおき、互いに連携しあい一貫性のある教育を行えるような教育システムが構築されています。

1年次には教養部(千葉縣市川市)での教養教育に加え、週に1回、御茶ノ水キャンパスにて連携教育が行われています。これは早い時期から専門科目の基礎を学ぶことで、医療人としての自覚を養い、その後の専門科目がスムーズに学べるように行われているものです。2年次には解剖学や生



国際的人材を目指すにぎやかな研究室のメンバーたちと、ぶどう棚の下で（後ろ中央が筆者）

* mtozuka.alc@tmd.ac.jp

化学といった基礎専門科目を、3年次には免疫学や臨床化学といった応用専門科目を学び、3年次終了までに臨床検査技師国家試験に必要な科目を学びます。

また国際的人材の養成も教育目標として謳われており、専門科目以外に語学教育にも力を入れ、学生は毎年 TOFEL を受験し、成績上位者は大学から補助を受け海外留学のチャンスも与えられています。

最終学年の4年次には前期に卒業研究、後期に約3ヶ月間の臨地実習と総合講義が行われます。総合講義では国家試験対策と臨床検査技師としての見聞を深めるため、教授による最新の研究内容の講義や、他大学病院検査部長などによるそれぞれの大学病院検査部の取り組みなど、将来を見据えた講義が行われています。

大学院に関しては、平成5年に博士前期過程、平成7年に博士後期課程が設置され、国際的に通用する本格的な教育者・研究者及び高度専門職業人の養成を目標に掲げ大学院教育が始まりました。さらに平成13年には大学院保健衛生学研究科として部局化(重点化)され、臨床検査分野において日本初の大学院大学となり、検査技師教育において常に時代の先端を行く教育を目指してきました。

博士前期過程では修士論文をまとめるための研究だけでなく、興味のある専門科目を選択し研究の基礎となる知識・考え方を学びます。東京医科歯科大学は大学院大学ということもあり、保健衛生学研究科だけでなく医歯学総合研究科や附属する難治疾患研究所といった他分野と連携し、他の研究科の院生であっても講義を聴講することができ、医療分野での研究において必要な多角的な分析力を養うための大学院教育が行われています。こうした臨床検査分野のリーダーとなる人材の育成に力を注いだ教育は東京医科歯科大学の特徴と言えます。

II. 研究室紹介

私(戸塚)が東京医科歯科大学に赴任してから4年が経過しようとしています。したがって、研究室はようやく落ち着き始めた状態といってもいい

かもしれません。現在、スタッフは私と助教1名、大学院博士課程2名、修士課程3名、そして6ヶ月間の卒業研究生(4年生)4名の、計11名です。ご存知のように大講座制の中の1分野であり、ごく小規模な研究室ですが、すでに報告のある多くの研究を含め、基礎研究を臨床検査の現場につなぐ役割を担おうと、学生諸君を中心に日夜(?)研究に励んでおります。また、研究成果を得ることを大きな目標としていることはもちろんですが、大学の研究室ですので、人材育成も大きな目標と思っています。研究活動を通じて、基礎知識・技術を習得し、さらには「目標自己設定型自己学習習慣の育成」とでも言えればいいのでしょうか、すなわち、与えられた研究テーマに添った一つ一つの実験を計画するために、自ら学習する習慣を身につけることが必要だと考えています。

教室の研究テーマは「動脈硬化性疾患の血清バイオマーカーの開発」であり、特に同疾患の *near-term risk* を評価できるような血清バイオマーカーに焦点を絞りたいと考えています。とは言っても、対象が多岐に及ぶため、本研究室ではリポ蛋白およびその関連物質にターゲットを絞って、新たな血清バイオマーカーの発見とその有用性の評価を目指しています。私が以前お世話になっていた、信州大学医学部附属病院臨床検査部や東京大学医学部附属病院検査部との共同研究も進行中で、大いにご指導いただいております。また、本学医学部附属病院検査部、輸血部、病理部には学部学生の臨地実習でお世話になっているほか、特に本研究室の研究内容を包含している検査部とは、現在の協力体制を共同研究体制へと発展させたいと考えております。

前述のように、研究室にとって研究成果は重要な最終目標の1つですが、本研究室に所属してくれる学生にとっては、研究が大きな意味で個々の成長のための *tool* になってくれれば、それに優る喜びはありません。高度専門職業人としての臨床検査技師を輩出したいのはもちろんですが、臨床検査技師マインドを備えた教育者・研究者の卵を世に送り出すのが本研究室の役割だと考えています。

III. 大学院生より

現在、私たちの研究室は大学院生が5人と卒業研究をしている4年生が4人の合計9人が在籍しています。そのうち社会人大大学院生が2人おり、あまり研究室には来られないので、実質7人で毎日実験しています。

研究室の唯一の決まりごとは、最低一日8時間の実働と週一回のミーティングです。一日8時間ということで特に登校時間は決まっていないのですが、遅くとも10時半前には登校し、その代わりに夜遅くまで研究室に残るという暗黙の了解のもと研究生活を送っています。また、ミーティングでは一週間の実験結果の報告を行い、それに関してみんなでディスカッションします。それによってお互いの研究内容に関して把握できるし、質問しあうことで新たな発見が見つかることもあります。ミーティングと並行して研究と関連した論文の抄読会も行っています。このミーティングとは別に保健衛生学研究科の他の研究室と合同のミーティングも月に一回行っています。他分野の研究に関する報告を聞くことで、より広い知識を

得ると同時に同じ大学院生として刺激を受けることも多くあります。

平成21年度は3月の下旬ごろから卒業研究が始まりました。初めは電気泳動やウエスタンブロットといった基本的な技術を教えるところからでしたが、夏までの約半年という短い期間でいろいろな失敗をしながらも、1つの研究として形にすることができました。また、秋からは学会の季節となり、いくつかの学会での発表の準備に慌ただしく日々が過ぎていき、現在は修士論文の審査に向けて追い込みの最中です。

日々、個々の研究に勤しみながら、研究の後に学生同士で飲みに行ったり、研究室の皆の誕生日会を開いたり、また、卒業研究の発表が終わり一段落した9月には、皆で旅行に行ったりと、毎日笑いの絶えない、ちょっと騒がしい研究室です。

(追記：教授・助教の誕生会も企画していただいております。感謝！<戸塚・栗原>)

本稿は教授、助教、大学院生(3名)の合作であることを申し添えます。